

地域情報（県別）

【長崎】重度難聴の耳鼻咽喉科医、研修医時代にデフバレーボール日本代表に選出-吉田翔・日本赤十字社長崎原爆病院医師に聞く◆Vol.3

ライフワークは講演活動、2025年には自身で講演会を企画

2026年10月5日（月）配信 m3.com地域版

両耳100dB以上の重度難聴を抱えながら、日本赤十字社長崎原爆病院（長崎市）で耳鼻咽喉科医として勤務する吉田翔氏。診療の傍ら、年間12回ほどの講演依頼を引き受けるなど、聴覚障害者やその家族に向けた啓発活動をライフワークとして続けている。聴覚障害のある耳鼻咽喉科医が講演を通じて届けたい思いとは何か。後進や地域社会につなぐ活動、今後の展望と合わせて聞いた。（2026年8月7日インタビュー、計3回連載の3回目）

▼第1回はこちら

▼第2回はこちら



吉田翔氏（c）NPO法人 前庭水管拡大症・ベンドレッド症候群の会（ZENPE）

研修医との二足のわらじで取り組んだデフバレーボール日本代表

——吉田先生は2017年にトルコで開催された、耳の聞こえない・聞こえにくいアスリートのためのオリンピックバージョンである「デフリンピック」に、デフバレーボール日本代表として出場するというユニークな経歴をお持ちです。

バレーボールは中学生から始め、高校、九州大学、佐賀大学と10～20代で熱心に打ち込みました。中学時代にはキャプテンを務め、県中体連で佐賀県1位になったこともあります。実は、高校進学の際にスポーツ推薦の話もいただいており、「プロになれるんじゃないか」と思ったこともあったのですが、母から「中学生レベルしか知らないでしょう」と諭され、進学校への受験へと気持ちを切り替えたという経緯がありました。そのため、31歳でデフバレーボール日本代表に選ばれたときは本当にびっくりしたことを覚えています。

——研修医との両立は大変だったのではないのでしょうか。

はい。日本代表に選んでいただいたことは本当に光栄なことなのですが、右も左も分からない多忙な研修医時代によくやっていたなと思います。

個人的に苦労したのは練習時間の確保です。日本代表が集まる機会は月に1、2回程度だったので、大学の体育館を借りて自主的に練習を続けていました。朝早く起きて練習したり、仕事終わりの1時間を筋トレに費やしたりと、とにかく必死でした。代表での練習も病棟の当番と重ならないようにし、朝9時からの練習に参加し、終わればそのまま病棟に向かうという生活を送っていました。

そんなハードな生活を支えていたのは「日の丸を背負うからには勝ちたい」という強い思い、そして、佐賀県庁・佐賀市役所や佐賀県バレーボール協会、友人、家族などの応援に応えなければという責任感でした。ナショナルチームのような競技に集中できる環境ではありませんでしたが、世界選手権（2016年）やデフリンピックに出場できたことは私にとって大きな経験となりました。デフリンピックでは2大会（8年）ぶりの決勝トーナメント進出に貢献することができ、夢を持つことの大切さを改めて体感しました。

また、初めてデフリンピックに出場して非常に印象に残っているのが、海外の難聴者たちが生き生きと競技に臨んでいる姿です。難聴という障害を包み隠さず、自分らしく生きてもいいんだと深く肌で感じることができました。



デフバレーボール日本代表に選出された吉田氏

20代から続ける講演活動、当事者としての経験を対等な立場で伝えたい

——現在は啓発活動の一環として講演にも積極的に取り組まれているそうですね。

はい。年間で平均12回ほどの依頼があり、長崎や佐賀はもちろん、東京や東北からお声をかけていただいたこともあります。2026年も日本耳鼻咽喉科臨床学会総会・学術講演会のパネルディスカッションやNPO法人前庭水管拡大症・ペンドレッド症候群の会（ZENPE）、一般社団法人 人工内耳の会 ACITAなどのオンライン配信などに出演しました。

聴覚障害者や家族向けの講演では、先天性難聴の当事者としての経験を対等な立場から伝えることを意識しています。また、医療従事者がメインの会場では聴覚障害を抱える等身大の医師として話すことを心がけています。良い意味で「医師らしくない」話しぶりが、講演に来場した方の印象に残っているのかもしれない。

——人前で話そうと考えたきっかけは何だったのでしょうか。

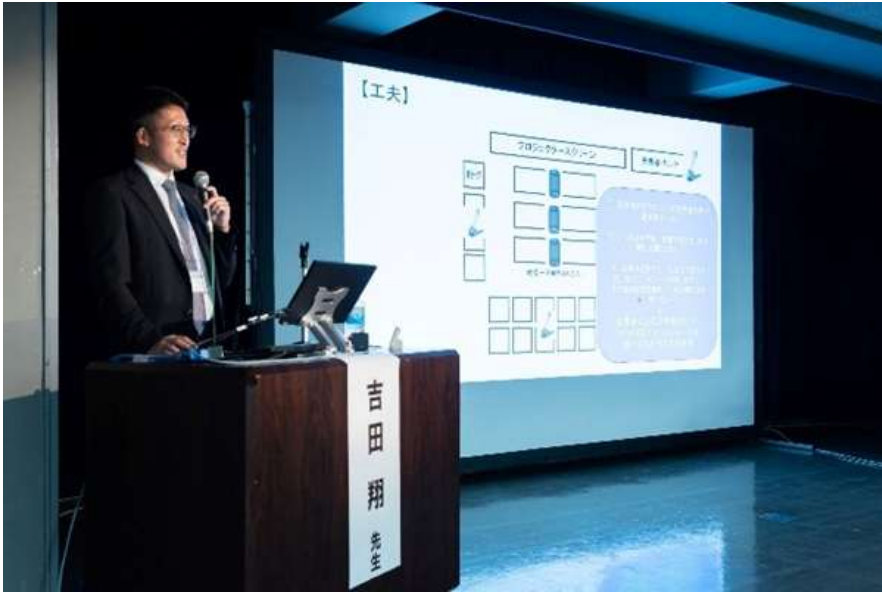
九州大学医学部保健学科4年次に参加した難聴児との交流会です。講演後の質疑応答の時間に、保護者から「どうしたら話せるようになるの?」「どんな育て方が良いか教えてほしい」といった質問が次々に飛んできたのです。この経験は私が医師の道を志すことになった契機でもあるのですが、「こんな自分でも必要としている人たちがいる」と実感しました。難聴の大変さを知ってもらいたいという思いが強くなり、依頼があれば積極的に引き受けるようにし、今日ではライフワークの一つになっています。

2025年には生まれ故郷である佐賀で補聴器や人工内耳を啓発するイベントを企画・主催しました。業者との折衝、会場の手配、演者の出演オファーなど、基本的に自分が中心となって行っています。講演も型にはまったような内容

にはしたくなかったので、保護者目線で聞きたくなる人選を意識しました。非常に好評だったので2026年も準備を進めているところです。このように少しでも難聴の理解が増えるよう積極的に啓発に取り組んでいます。

——日々の診療と並行して、啓発活動続けるためのモチベーションは、どこにあるのでしょうか。

講演をすることで、自分自身も初心に帰れる、ということです。聞いてくださった人から「頑張ってください」「励みになりました」などと声をかけていただけることが何よりのやりがいですし、当事者でよかったと思える瞬間でもあります。ただ、講演だけでは伝えきれない部分がありますので、これからもさまざまな形で啓発活動に取り組んでいければと思います。



講演の様子

ゆくゆくは生まれ故郷・佐賀の小児難聴の課題に取り組みたい

——現在は先生と同じように聴覚障害を持ちながら医師を目指す後進のために注力なさっているそうですね。

もともと、医師は絶対的欠格条項というものがあり、聴覚障害者は医師になることができませんでした。しかし、2001年の医師法改正で相対的欠格条項に変わったことで、私のような先天性難聴でも医師を目指せるようになりました。

この背景には多くの先輩方による努力の積み重ねがあります。だからこそ、私は聴覚障害を持つ医師の一人として、同じ聴覚障害をもつ若者が健常者と同じように医師の道に挑戦しやすい環境を作る役目があると感じています。

例えば、医師国家試験における補聴器や人工内耳の使用の可否は都道府県に委ねられています。中には試験中、補聴器や人工内耳の使用不可というところもあったようです。ただでさえ受験勉強で忙しい後輩たちが、余計な苦勞をしなくて済むよう、諸先輩方の力を借りながら厚生労働省などに働きかけ、全国で対応を統一できるよう取り組んでいるところです。

——聴覚障害を持つ医師として、今後、どのような役割を果たしていきたいと考えていますか。

やはり、耳鼻咽喉科医を志した原点である小児難聴に力を入れていきたいです。

これまでの診療でも小児難聴に関するさまざまな相談がありました。例えば、6歳になっても言葉が出ないお子さんについて、セカンドオピニオンを求められたケースがあります。私の所見では少し気になるところがあり、大学病院での精密検査を受けるように勧めたところ、最終的に人工内耳が必要だと分かったのです。

先天性難聴には1-3-6ルールがあり、生後1カ月までに精密検査を受け、3カ月までに診断を行い、6カ月までに補聴器を装用することが望ましいというルールです。このように早期発見・早期療育が先天性難聴には重要となってきます。そのため、療育などが遅れ、保護者の方もさぞ不安でしかなかったと生の声を聞き、本当に歯がゆい思いをしました。こうした経験を重ねるうちに「小児難聴の課題を何とかしたい」という思いは年々、強くなっています。

――最後に、今後のキャリア展望をお聞かせください。

まだ決心まではいかないのですが、いずれは故郷である佐賀に戻って総合病院や大学病院にて研鑽を積み、地域の方々の窓口になれるような耳鼻咽喉科クリニックを開業できればと考えています。小児からご高齢の方まで難聴について相談しやすい場所を作ることが大きな夢です。

加えて、佐賀県の小児難聴に対するサポート体制についても向上させていきたいと考えており、半日ほど有給休暇を取って、ろう学校や市議会、保健所、県庁の障害福祉課などを訪ね、地域の体制をどう変えていけるか相談して回っています。先天性難聴である私を育ててくれた故郷への恩返しのつもりで、有言実行できるようしっかりと取り組んでいきたいです。

◆吉田 翔（よしだ・しょう）氏

2008年に九州大学医学部保健学科を卒業し、臨床検査技師の資格を取得。医師を志し2010年に佐賀大学医学部へ入学。2016年同学部卒業後、NHO佐賀病院での初期研修を経て、2018年に長崎大学病院耳鼻咽喉科・頭頸部外科に入局。長崎みなとメディカルセンター、佐世保市総合医療センターなどを経て、2024年より日本赤十字社長崎原爆病院耳鼻咽喉科に所属。耳鼻咽喉科専門医、補聴器相談医、臨床研修指導医。

【取材・文＝小森大悟（写真は吉田氏提供）】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

